

野田市中途失聴者・難聴者の集い 「みみづくの会」設立趣意書

平成9年 4月 7日
設立発起人 西村 勝
平井 りえ子
吉岡 靖二

聞こえない、聞こえにくいと言う障害は、他の人からは見え難いため、障害者であることを気付かれなかったり、どの様に困っているか、またどの様に対処したら良いのか、なかなか分かって貰えない面があります。

特に、人生の半ばにして、聞こえに重度の障害を持った難聴者や中途失聴者の多くは、障害を持ったことによる挫折感や、コミュニケーション不足から生じる精神的な苦しみや悩みが大きく、人との交流や外出の機会が少なくなり、家族からも孤立して、家の中で寂しく閉じこもりがちの生活になります。

この様に同じ悩みや苦しみを抱えている同障者が会し、要約筆記者などの周囲の人の理解と協力を得ながら、よりスムーズなコミュニケーション方法で、それぞれの思いや悩みと言った問題を話し合い、お互いの立場を理解し合い、親睦を深め、自助努力しながら、より楽しく有意義に過ごしていきたいと思えます。

つきましては、同障者や広く一般市民にも呼びかけ、地域に根ざしたサークル活動に発展させるべく、野田市中途失聴者・難聴者の集い「みみづくの会」を設立する事にしましたので、ご協力とご理解の程を宜しくお願い申し上げます。

一般的に聴力障害者のコミュニケーション方法は、失聴年齢や、聴力レベル、受けた教育、育った環境等、また、周囲の状況などにより異なり、手話、口話、筆談など、その時その場に即応し、自分に合った方法を選択しています。また、このところの社会情勢の変化や科学技術の進歩は特に著しく、その選択の方法は一段と多様化しています。

最近、テレビなどのメディアの影響もあり、聴覚障害者にとってのコミュニケーション手段の一つである手話の広がりは大変めざましく、社会的にも良く理解される様になって来ました。

しかし、聴力障害者の多くを占める中途失聴者や難聴者は、日常会話を音声言語に頼り、主に残存聴力を生かした読話（口話）や筆談で、コミュニケーションを図っています。そのために手話の分からない人が多く、あまりその恩恵には浴していないと言うのが実状です。

中途失聴者や難聴者のコミュニケーションの手だてとしては、補聴器や磁気ループなど補聴支援システムによる「聞こえ」の確保や、要約筆記通訳者など各種の文字情報支援システムが望まれます。

今や加速的な超高齢化社会にあり、一般的に70才以上のお年寄りの半分は軽度の難聴と言われており、ますます耳の不自由な人が増加する傾向にあります。

それぞれその人に合ったコミュニケーション方法が望まれているにも拘わらず、その適当な対応策が明確でなく、「耳が聞こえない」＝「手話」という意識に直ぐに結びつけられてしまい、難聴者や中途失聴者のコミュニケーションに最も有効な手段である新しい補聴器の利用や、新しいコミュニケーション機器の導入や磁気ループの配備などに対する認識や配慮が不足しています。

また、要約筆記奉仕員の養成や要約筆記通訳者（OHP）による文字表示による情報保障といった事が等閑にされている状況にあります。

障害者基本法を踏まえ、福祉向上の施策として「福祉の町づくり」（障害者プラン策定）が全国的に取り上げられ、また、行政の地方分権が叫ばれている最中でもあり、身近な地域社会に対して、コミュニケーション障害の認識と理解を広め、バリアフリー社会を目指して努力していきたいと思えます。

よりスムーズで的確なコミュニケーション手段や情報の保障が拡充されることにより、積極的な社会参加と自立が促進され、より一層、明るく希望に満ちた潤いのある暮らしの出来ることを願っています。